

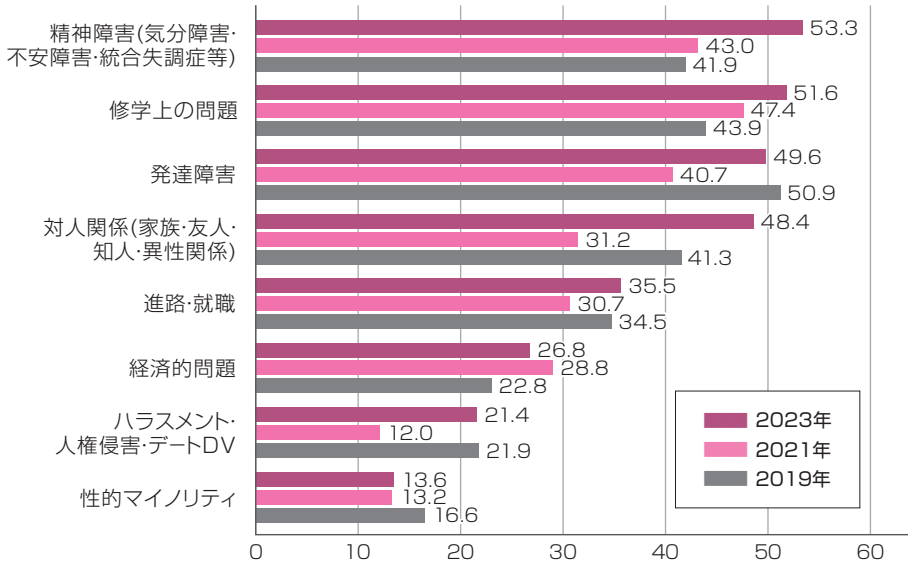
グラフで見る名大生 [25]

大学生の悩みは いま

コロナ禍を経て大学生の悩みはどのように変化しているのでしょうか。全国の大学機関に対する調査結果から、1大学あたりの学生相談の平均相談件数は2022年度1,238件と、コロナ禍前(平均1,000件前後で推移)よりも大幅に増加しています。下の図は大学が「増えている」と考えている具体的な相談内容の推移です。多くの機関が「精神障害」「発達障害」を「増えている」と回答したことから合理的配慮の義務化によって大学機関側も受け入れ態勢が整備されつつある状況が窺えます。「修学上の問題」もコロナ禍後も引き続き増加傾向にあります。そして「対人関係」「進路・就職」については、コロナ禍中に潜んでいた問題が顕在化してきた様子が窺えます。

同調査の学生相談に関する今後の課題については、87.4%の大学が「悩みがあっても相談に来ない学生への対応」と回答していました。別の調査にはなりますが、日本学生支援機構が実施している2022年度の学生生活調査の結果からは、半数以上の大学生が将来についての不安を潜在的に抱えていました。また、学業上の悩み(4割弱)や対人関係の悩み(2割程度)を抱える学生も一定数存在するものの、幸いにも学年進行によってこれらの不安や悩みは減少する傾向も見えています(同調査結果の44～45頁を参照)。学生相談や専門家だけでなく、日常的な教職員と学生、学生同士のやり取りや関係性の構築によって学生の悩みや不安を減少させていく可能性を持っているといえるでしょう。(安部有紀子)

図 大学が「増えている」と回答した相談内容(経年比較)



【データ】◎「大学等における学生支援の取組状況に関する調査(令和5年度(2023年度)結果報告」および同調査の「令和3年度(2021年度)結果報告」(日本学生支援機構)をもとに執筆者が項目を抽出、経年比較図を作成した。作図には「調査結果(単純集計)」を用いた。学生生活調査の概要および結果の詳細は(https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_torikumi/2023.html)を参照。◎大学生調査の結果および詳細は「令和4年度学生生活調査」(日本学生支援機構) (https://www.jasso.go.jp/statistics/gakusei_chosa/2022.html)を参照。

先日、ジェーン・ナイト先生(高等教育国際化領域の著名な研究者)を名古屋大学にお迎えしました。先生はカナダを拠点として日本を含めた世界各国を訪れています。名古屋には初めていらしたそうです。私が担当した大学院の授業では彼女の近著『Knowledge Diplomacy』(Springer) をテキストとしていたので、履修生に彼女の来学を伝えたいという、「本物ですか?」「サ

スター研究者の源泉

イン賞つていいですか?」「たまげました」「Brilliant!」やうに率直な感想が寄せられました。彼女の短い滞在はとても刺激的であり、楽しい時間を過ごしつつも、スター研究者（学術論文の被引用数が極めて多い研究者）のパワーを感じました。

彼女はともユーモアにあふれていました。小さな教室で直に相対して緊張している学生に対して、開口一番、「私はいつも話し

すぎるの。小さいころにおしゃべりが止まらないと、両親は小鼻をこすって話し過ぎているよと合図してくれたものです。みなさんも私が話し過ぎていたら、同じように合図してね」と伝えたところ、学生は笑い出しました（後日、鼻がかゆくてもかかないように堪えていたと1人の学生から聞きました）。別の学生は、授業後に提出したミッツペーパー（MP）で、授業でのユーモアの大切さについて触れていました。重要だと分かっている（『ユーモアは最強の武器である：スタンフールド

ん

春号

名古屋大学
高等教育研究センター
ニューズレター第90号

大学ビジネススクール人気講義『東洋経済新報社』、授業ですべてが気まずい空気になったらと躊躇することもあります。でも何とか取り入れたいものです。ちなみにユーモアは授業のみならず収容所で生き残るためにも役に立つようです。

彼女の溢れんばかりの好奇心や、セミナー参加者との対話を楽しむ姿勢も強く印象に残りました。参加者に多くを問い、彼らからの質問にとても丁寧に答えていました。1人の参加者は、各種の分断を助長しドラスティックに変化する昨今の世界情勢の下で、私達大学関係者は研究や教育の国際化にどのように向き合えばいいのか、といった趣旨の質問をしました。しばらく考えた後の彼女の答えは「Keep asking（問い続けてください）」という短い文に集約されていました。そういう彼女自身が常に問いつける研究者でした。セミナー以外にも一緒に過ごす時間の長かった学生は、自身の研究について質問攻めにあい、「先生の好奇心の大きさに圧倒された」とMPに書いていました。彼女は私にもたくさん質問されました。例えば、大学での打ち合わせに出席された後で、「さっきの男性ばかりの会議ではどうして責任者1人しか発言しないの？他の人達は何のために出席しているの？」と聞かれました。私にとっては日常的な風景を不思議に思われたようです。

また学生が良い質問をしたことや、彼らとのセミナー内外での交流を楽しめたことから、素敵な学生達に会えて嬉しいと繰り返し伝えて頂きました。教員にとって何よりの誉め言葉です。また今は昔のことですが、私が米国大学院で学んだ際に、調子に乗ら

ないように注意しなくてはならないつも、褒められて温かい気持ちで過ごしたことを思い出ししました。日本では褒めることが少ないと改めて感じると同時に、対学生に限らないことにも思い至りました。

以前に、日本の大学の良い面を
考えてみたいと日本人の大学教
員（元同僚）に伝えたところ、そ
んなものがあるのかと笑われた
ことがあります。他人のやる気
をくじくディメンター（ハリー・
ポッターに登場する、人間の魂を
奪う存在）はどこにでもいるも
のですが、納得する面もあります。
大学で働く人たちの職に任期が

付くことによって身分が不安定になり、意義が見い出せない仕事
がはびこり、学問の自由が狭められ、自治が危うくなるなど、批判的な材料ならいくらでも見出せます。このような中で大学の良いところに目を向けるのは案ではありません。しかし希望を捨てずに問い続ける先に、展望があるようにも思います。

ナイト先生の訪問を改めて振り返った時、とび抜けたロールモデルに触れたように感じます。彼女が執筆するような論文をいくつか書きたい、あんな授業をしたい、相対した者がそんな気持ちを持てた贅沢な時間を過ごしました。彼女の短い滞在は名大の芝生が冬枯れた寒い頃でしたが、この原稿が皆さまに読まれるのは暖かい春かその先です。その頃には私の記憶も少し風化していそうですが、忘れられない出来事として大切にしたいと思います。

（加藤真紀）

大学教育改革フォーラムin東海2025が開催されました

2025年3月8日(土)に大学教育改革フォーラムin東海2025が本学東山キャンパスで開催されました。大学教育について一緒に議論し、連携・連帯を深め、質の高い大学教育をこの地域に実現しようと始められたこのフォーラムは、記念すべき第20回を数えました。これはひとえに、実行委員を務めてくださる近隣大学の教職員の皆さま、ご登壇・ご参加くださる皆さまをはじめ、多くの方々の支えがあつてのことです。大学教育のますますの発展のために、これからのフォーラムにもお力添えをいただければありがたいと思います。（前 研究員 東岡達也）



2024年度
名古屋大学学生論文コンテスト審査結果

2024年度は2名に賞が贈られました。
入選論文は名古屋大学学術機関リポジトリにて近日公開の予定です。

入選【佳作】 法学部1年 助田麻由里さん
「大学生のアルバイトの職種と動機・継続要因の関連」
選外【奨励賞】 情報学部3年 樹神 宇徳さん
「大規模言語モデルを用いた青春の定量的な定義法の考案」

かわらばんへのご意見・ご感想をお待ちしております。
センターWEBページのフォームよりお寄せください。

Higher Education Glossary

—— 高等教育にまつわる用語集 ——

任期制教員 Non-Tenured Faculty

任期制教員とは、一定の契約期間を定めて雇用される大学教員のことです。契約期間は数年単位で設定され、更新が認められる場合もあるものの、必ずしも終身雇用（テニユア）に移行できるとは限りません。1997年に大学の教員等の任期に関する法律が制定されて以降、日本の大学ではこの制度が広がり、若手研究者の登用促進や大学の流動性向上を目的として導入が進められてきました。一方で、長期的なキャリア設計の難しさや研究の継続性の確保といった課題も指摘されています。

任期制教員は、多様な研究分野や異なる機関での経験を持ち込むことで、大学に新たな知見や教育手法をもたらす役割を担っています。そのため、大学の研究や教育の活性化に貢献する側面があります。しかし、契約期間の終了が近づくと、次の契約更新の可否が決まるまでの間、不安を抱えながら日々の業務に取り組まなければならないかもしれません。同僚との会話の中で「次のプロジェクトにも関わる予定ですか?」と尋ねられても、確信を持って答えられないこともあります。また、長期にわたるプロジェクトでは、契約の終了によって途中で関与できなくなる可能性があるため、業務の進め方に工夫が求められます。

近年では、生成AIなどの技術革新により、業務のサポート環境が進化し、短期間でも成果を上げやすい環境が整いつつあります。また、企業や行政との兼業を行う「ハイブリッドキャリア」を志向する教員も増えており、任期制を活かした新たなキャリアの可能性が広がっています。このような動きが進めば、契約更新に振り回されるのではなく、柔軟なキャリア形成を見据えて動くことが現実的になるかもしれません。

かくいう私も任期制教員の一人です。契約期間の終わりは常に視野に入れておかなければならず、「この仕事は来年も続けられるのか」と思うこともあります。しかし、それを制約として捉えるのではなく、新たな経験を積む機会と考えるようにしています。そうしなければやっていられないという側面もありますが、とにかく、変化を前向きに受け入れ、限られた時間の中でできることを積み重ねていくことが、任期制教員としての働き方なのかもしれません。

(前 特任准教授 松本みゆき)

T：今春、私たちも高等教育研究センターを巣立ちますね。私はここが初職なので、日々新しいこと、学ぶことだらけで、あつという間の3年間でした。
S：ここにいれば、たくさん学びがありました。また、FD・SDを通じて、多くの教職員に出会えたのは財産だなと思います。
W：教員と職員がこんなに近くで仕事ができるのは、ありがたかったですね。教職協同ができるとう大学の力が一番発揮されると思うのですが、意外と難しくて。
S：着任当時、先輩教員たちの「誰しもが成長・変容できる」という強い信念に圧倒さ

れたことも思い出します。
W：教育はだれもが経験しているだけに、教育の理論とか技法とかの学問知は置き去りにされがちです。このセンターは、大学での教え方を教えるというところに歴史があつて、大学「教育」を下支えする大切な機能をもっているということを、ここに着任して実感しました。
T：地味だけど大切な機能の裏側に、強い信念があつたわけですね。私はQTAをトレーニングする仕事をしてきまして、「教える側にも学びがある」ということを実際に体験できました。
S：FD・SDやブレFDについて、私は、高等教育学のア

ウトリーチの一つのかたちだと考えてきました。アウトリーチも双方向型が求められる時代ですから、よく似ているのです。一方で、受講者も大学コミュニティの仲間である、というユークサもありました。
W：「コミュニティ」ということでいえば、「大学らしさ」をどう伝えるか、職務のあり方についてに反映させるか、というのは永遠のテーマかもしれないですね。いいことをやっているのだから、ドンドン伝えていけばいい。私たちがそれをどう体现するかということも含めて。
S：そういえば初代センター長の馬越先生は、センターは

「内なる他者の目」をもつことが必要と記していらつしゃいました。
T：内側にいながらも、大学の状況や置かれた環境を客観視して調整していく、ということでしたね。
S：環境変化が激しいからでしょうか、四半世紀前の言葉なのに色褪せないことに感心します。
W：「内なる他者の目」があればこそ、センターもまだまだ進化していけそつです。
S + T + W：これからの高等教育研究センターも、目が離せませんね。引き続きご支援のほどを、どうぞよろしくお願いいたします。

センターによる各種セミナーや新刊などの情報をメールでお知らせしています。本サービスへのご登録は、センターWEBページの「情報配信サービス登録はこちら」よりお申込ください。



読んでおきたい この1冊

Great Books on University

『科学立国のための大学教育改革： エビデンスに基づく科学教育の実践』

カール・ワイマン 著 大森不二雄、杉本和弘、渡邊由美子 監訳
玉川大学出版部 2021年

「ミクロレベルの授業改善の普及如何を左右する決定的要因は、よりマクロな学科等組織の在り方である（監訳者序文より）」——これが本書のエッセンスと言えるでしょう。この一文には、高等教育学と「分野別教育方法論」(DBER: discipline-based education research) の両方の視点が含まれています。DBERとは、物理学や化学など理工系の教授法の開発やそ

の効果検証などを通じ、エビデンスに基づく授業改善を推進しようとする研究領域です。DBERによって、DBER研究者やその周辺教員の授業改善は進みました。しかし、理工系教員の教育実践が広範には変化していないことが長年の課題とされていました。この課題の克服に挑んだのが、著者のワイマン博士です。同氏はコロラド大学ボルダー校等で「科学

教育イニシアティブ」を主導し、広範に渡る教育改革を推進しました。本書では、その実践から経験的に得られた教訓が明解に述べており、その中で最も重要なものの一つが冒頭の一文です。ワイマン博士は、教学マネジメントにDBERの知見普及の活路を見出したのです。

DBERには理工系出身の研究者が多いなか、本書は高等教育学を専門とする方々が中心となり翻訳されたものです。本書は両分野の架け橋として位置づけられるものであり、本書を通じてその交流がますます深まることが期待されます。

(安田淳一郎)

高等教育研究センタースタッフ (2025年4月現在 ()内は専門領域)

センター長	北 栄輔	(情報学、機械工学、計算科学)	客員	小林 元気	(鹿児島大学総合教育機構)	名古屋大学高等教育研究センター
教授	加藤 真紀	(高等教育学、国際人口移動、知識創造)		平井 達也	(明治大学国際日本学研究所)	〒464-8601 名古屋市千種区不老町
准教授	安部 有紀子	(高等教育マネジメント、学生支援)		藤原 宏司	(山形大学学術研究院)	Tel 052-789-5696
准教授	安田 淳一郎	(高等教育学、学習評価、物理教育研究)				Fax 052-789-5695
						URL web.cshe.nagoya-u.ac.jp